# J. S.ミルの成長理論と国際調和への発展的プロセス（上）

## ―― 人生の相対的価値規準と絶対的価値規準に依拠して ――

前　原　正　美

## Ⅰ　はじめに

人間には，それぞれ神に与えられた使命がある。その使命とは，自らの生命（いのち）を社会全体の幸福の実現のために，ひいては全人類の幸福の実現のために使用してゆく，ということであり，いいかえればそれは，自らの愛を社会全体の調和のために，ひいては全世界の調和のために広く高く施してゆく，ということである。

本論文では，人間が神に与えられた使命を発見し，その使命を果たしてゆくプロセスを人生の相対的価値規準から人生の絶対的価値規準へと転化してゆくプロセスとしてとらえ，そのプロセスを経て辿り着く人間の幸福とは何かを，Ｊ．Ｓ．ミルの数ある著作を手がかりとして明らかにすることにある(1)。

## Ⅱ　人生の相対的価値規準

### 〔1〕自己と他者との相対的比較

人間の幸福とはまず，自らの望む自分になるということである。人間が幸福になるためには，何よりもまず望みが必要なのである。

人間の望みは，理想から生まれる。人間の理想は，自己と他者とを比較対照することによって生みだされてゆく。ある意味では人間は，ある特定の他者に自分の望む人間，つまり理想的な人間像を見いだし，それによって自分が自分の人生に何を望んでいるのか，あるいは自分はどういう人間になりたいのかを発見できる。

人間の望みは自分のなりたい自分になることである。そのためには理想が必要である。そもそも人間の心のなかには，はじめから理想的な人間が宿っている。たとえば自分が金持ちを見て，金持ちになりたいとおもうのは，自分の心のなかにはじめから理想的人物が存在

しているからなのである。

しかし人間は，自分ひとりではその理想的人物を発見できない。自分の心のなかにある理想的人物が現実に現れることによって，はじめて人間はその心のなかにある理想的人物を発見し，そうなりたい自分を発見するのだ。

したがって人間が最初の理想的人物を発見するためには，そしてそれによって自分の望みを明らかにするためには，自己と他者との比較が大切なのである。

人間は自己と他者とを比較することによって，自分の望む自分，自分のなりたい自分を発見してゆく。

たれしも人は，無意識のうちにも自分の周囲に登場する見知らぬ他者を観察し，そうして自己と他者とを比較対照しているのだが，ある特定の他者に自らの理想的人物を発見し，したがってまたその特定の他者に共感しえた時，その他者のなかに自らの望む自分，自分のなりたい自分を発見しうるのである。

**人間の幸福を実現するための質の価値規準となるのは，自分が他者の経験をする機会を持つ時に，あるいは他者の経験に加えて自己意識と自己観察の習慣の能力が高まる時に，自己と他者を比較する手段，すなわち共感能力をもっとも高く育成した人びとが行った選択に対して共感すること以外には存在しない（〔3〕『功利主義論』472頁）。**

要するに他者への共感を通じての自己の理想的人物の発見こそが，人の人生における最初の理想の発見であり，望みの発見であり，つまりは人生の目標の発見である。そしてそれは，人の人生における最初の自己の発見に他ならない。

たとえば自分が歌が好きであり，見知らぬ数多くの他者の歌を聞いているうち，ある特定の歌手に自らの理想的人物を発見し，したがってその特定の歌手に共感した時，自分も歌手になろう，と決意したとする。

その時，自分はその特定の歌手のなかに自らの理想を見いだしたのであり，したがってまた自らの望みを歌手になることに見いだしたのであり，つまりは自分もまた歌手になるという人生の目標を見いだした，ということになる。

そしてそれは，数多くの見知らぬ他者と自己との相対的比較を通じて発見しえた理想的な自分自身に他ならない。

こうして人は，自己と他者との相対的比較を通じてはじめて人生における最初の自己を発見し，自分の望む自分，自分のなりたい自分，いいかえれば自ら定めた理想の自分を創造してゆく，という人生の目標にむかって利己心を発揮し，努力してゆくようになるのである。

その結果，自分が歌手になったとすれば，自分は人生における最初の人間の幸福を感じることができるであろう。なぜならば人間に利己心があるかぎり，たれしも人は，利己心を満たしてこそ，人生における喜びを手にすることができるからである。

そして今度は，歌手としての仕事を通じて自らの個性＝自己能力を鍛えあげ，そしてまたさまざまな経験を通じて自然的感情を豊かに培い，さらには知的・道徳的にも成長し，歌手としての意識を高め，共感能力を高めて，歌手としての器量を大きく育ててゆくことになる。

そうして自らの仕事を通じて意識が高まり，他者への共感能力が高まれば，最初に自分が理想とした特定の歌手よりもはるかに意識レベルの高い特定の他者に共感し，あるいはまた自分の良心が照らしだす最高度の特定の他者のなかに究極の理想的人物を発見し，その人物に対する自らの想いを伝えようという使命に目覚め，人生の目的を見いだすのである。

もとより人生の目的とは，人間としての自分の人格を最高度に高めてゆく，ということである。

**人間社会においては，人間一人ひとりが自分自身の人格をおよぶかぎり最高度の状態に近づけてゆくということこそが，人生の最上最善の，つまりは唯一の目的となるのである（〔2〕『自由論』288頁）。**

たとえば自分が石田三成という人物の存在を識(し)り，石田三成が妻あや子と愛の心を重ねあわせ，そしてまた石田三成が天下泰平の世を構築することに自らの使命を見いだし，その使命のために自らの想いを同じくする者たちとともに生き抜いた高潔な人物であり，自らの生命を犠牲にして関ヶ原の合戦を起こしたかぎりない愛の人であった，と識ったとする。そして自分が三成という人物に感動し，石田三成という特定の他者のなかに究極の理想的自分を見いだし，三成とその妻の想いを歌という仕事を通じて世に伝えてゆこう，と決意したとする。

その時，自分は石田三成という人物のなかに自らの良心が照らしだした究極の理想的人物を見いだし，その特定の他者のなかに自らの想いを見いだし，そして自らの生命がよみがえり，そしてまた自らの心に宿る愛がよみがえって，石田三成という人物の愛ひとすじの人生，さらにはまた三成とその妻あや子との愛の人生を自らの歌という仕事を通じて世に伝えてゆこう，という使命に目覚めるのである。その結果，人生の目的とは自分を最高度に高め，愛の心を培って，自らの愛を広く世のために人のために，ひいては全人類の幸福のために施してゆくことである，と識るのである。

こうして人は，自己と他者との相対的比較を通じて自らの理想とする人生の目標を具体的に見定め，その目標を達成しようと努力してゆくプロセスのなかで，自らの意識と共感能力を高めて，自らの良心が照らしだした究極の理想的人物のなかに，最高度の自分自身のあるべき姿を発見し，自己の発見に至るのである。

その結果，人間としての最高度の自分自身，かぎりない愛を自らの仕事を通じて世に施してゆける自分自身を創造してゆくことにこそ，人生の目的があり人間の使命があるのだ，と意識して生きてゆけるようになるのである。

明らかにこのことは，人生の理想＝目標は人生の目的＝使命へと転化する，ということを物語る。

人生の理想たる目標は，生活水準の向上や地位・名誉の向上などの私的利益の増大を目指す人間の利己心に依存するが，その目標を達成しようと努力するプロセスのなかで，たれしも人は，共感能力を著しく高め，ある特定の他者のなかに究極の理想的人物を発見し，人生の目的たる人間の（自分の）使命を発見するに至るのである。いいかえれば人は，自らのうちに宿る感動の心がよみがえれば，自らの想いを，そしてまた自らの愛を世に伝えてゆく，という使命に目覚め，さらには自らの愛の心を深く培って，かぎりない愛の心を世に施してゆけるようになるのである。

究極の理想的人物の発見は，自らの良心が照らしだした最高度の自分自身の発見であり，まさにそれは神の発見に他ならない。なぜなら良心とは，自らの心に宿る無限の愛の心であり，つまりは神の心であるからである。

したがって人生の目的＝自らの使命を発見しえた人間は，自らの心に宿る神を発見しえた人間であり，つまりは自らの良心＝無限の愛の心に目覚めた人間であるがゆえに，神と心をひとつにして生きてゆくようになるのであり，いいかえれば自己と他者（人間）との比較という人生の相対的価値規準を超えて，自己と神との比較という人生の絶対的価値規準に従って生きてゆくようになるのである。

およそ人間は，自己と他者とを比較して生きているあいだは，自己と他者との競争を繰り返したり，自己と他者との感情や意見の相違に悩んだり，自己利益の増大に全力を尽くしたりするが，そうした自己と他者との相対的価値規準を超えて，自己と神との絶対的価値規準に従って生きてゆけるようになると，すべての事実をありのままに受け入れてゆくことの重要性を認識し，自らの愛をかぎりなく注いでゆくことができるようになるのである。

もとより人の人生の目的は，自己と他者との競争ではなく，最高度の自分自身を創造してゆくことにあるが，その意識と認識とに到達しうるためには自己と他者との相対的比較を通じて，神に与えられた使命を発見することが前提となるのである。

その意味において，人の人生は自己と他者との相対的比較が何よりもまず重要となるのである。

したがって自己を発見するためには，人生の出発点における自己と他者との相対的な比較対照，すなわち人生の相対的価値規準が極めて重要である。

**自分の意見［感情］を他者の意見［感情］と比較対照し，その自己と他者との比較対照によって自分を改善し，より完全な自分に近づけてゆくという着実な習慣は，ある特定の他者［理想的人物］に正当な信頼をよびおこす唯一の確かな根拠となる（〔2〕『自由論』236頁）。**

人間にとって，他者は自己を照らしだす鏡である。人間は自己と他者との比較があってこそ，自分自身を識ることができる。

**一般に人の人生の最初は，賢明な他者である一人の個人によって拓かれる。一般の平均的な人間が，自らの名誉や栄光を手に入れるためには，自分自身がその賢明な他者に共感できるということ，したがってまた自分自身が賢明で高尚な他者の意識を自分の心で感受できるということ，そしてその自己の他者への共感によって自分が目覚めてそうした他者に導かれてゆくということ，それ以外にはない（〔2〕『自由論』291頁）。**

以下，自己と他者との比較対照という人生の相対的価値規準に従って自己の発見に辿り着くまでのプロセスを考えてみよう[(2)]。

### 〔1〕—(1)　両親との相対的比較

すべての人間にとって，この世に生命（いのち）を授かって最初にめぐり逢う他者は両親である。両親との出逢いこそは，人の人生を決定づける最初の大きな影響を与える。その意味で両親という他者の存在は，人の人生においてきわめて重要な意味を持つことになる。

何よりもまず第一に，人は両親という存在によって自分自身の生きる最初の環境を与えられる。人間にとっての最初の社会は，両親を軸とした家族社会であり，あるいはまた自分が直接に生活を営む地域社会である。

人間はそうした社会のなかで，人間関係をつくりあげ，自己の感情や性質を形成してゆくのである。

人の人生において，自分に与えられた環境ほど，のちの人生に大きな影響を与える要素はあるまい。結論を先取りすれば，自分に与えらえた環境のなかには，人生の目標，ひいては

人生の目的，したがってまた自らの使命を発見しうる手がかりのすべてが用意されているからである。

**家族関係は，人間の幸福への直接的影響を及ぼすという点では，他のすべての人間関係を総合したばあいよりも重要な位置を占める（〔2〕『自由論』335頁）。**

人間にとっての最初の人間関係は，両親との出逢いによって始まる。神と人間との関係を抜きにして考えれば，いいかえれば人生の相対的価値規準に従って考えれば，両親は自分に生命を与えてくれた存在である。

なるほどさまざまな事情のために，両親と別れ別れになった人もいるだろう。しかし自分の生命が存在し，また自分の人生が存在するのは，両親の存在あればこそである。

人間にとって最初の世間は，両親を軸とした一族社会である。

人間は，親や兄弟，親戚といった最初の世間のなかで，無意識のうちにも最初の自己と他者との比較をし始める。それはひとつには，そうした環境のなかに，すでに自分の個性＝自己能力を発見する環境が与えられているからである。そこから利己心が育つ。

たとえば親や一族のなかに，歌手になりたかった人や歌のうまい人がいれば，自分は歌手になろうという最初の希望が生まれる。歌手になった多くの人びとは，その希望を十代のうちに抱いている。それは自分の親が民謡や三味線がうまかったり，あるいは実際に民謡歌手であったりして，その歌を聴きながら育っているからである。

人間にとって両親の影響は計りしれない。というのは人間の心や感情は，まず家庭環境によってつくりあげられるからである。

両親と自分との相性が悪ければ，両親への不満だけでなく，自分の人生それ自体への不満が募るだろう。

いかなる人間であっても，自分が生まれいでた小さな環境のなかで，親や兄弟（他者）と自分を比較するなかで，その他者と違う自分（自己）の発見に至る。たとえ親との相性が悪いとしても，そのことによって親は自分を理解してくれないこと，つまり自分が親とは異なる存在であることを識る。その意味で，人間はいかなる状況でも，自分と他者との相対的な比較があってこそ，自分自身を識ることができるといえる。

たとえば経済的に貧しい両親のもとに生命を授かった者があるとする。人の人生の目標は，そうした与えられた環境のなかから生みだされる。自分が貧しい環境のもとに生まれたとすれば，たれしも人はそれを不遇と受けとめず，むしろ逆に両親に親孝行したい，そのために金持ちになってやろう，とおもうであろう。さらにはまた自分の親が医者であり，自ら

の仕事を通じて世のために貢献している姿を見れば，自分もまた親のあとを継いで医者になろうとか，あるいは逆に親と自分との個性＝自己能力の違いに気づいて医者にはなりたくない，と感じるであろう。

このように自分の両親の生きる姿を見て，自分もまた両親のような仕事をしたい，とおもう者は，すぐに人生の目標が見つかるであろうし，逆にまた両親が従事している仕事に就きたくないとおもえば，そこから自分の個性＝自己能力を鑑(かんが)みて，自分は一体，どういう自分になりたいのか，という人生の目標を探し求めるであろう。

いずれにせよ人生の出発点においては，このように無意識のうちにも自分と両親との相対的比較行為を通じて自らの人生を歩き始めてゆくのである。

ともあれ自分と両親の出逢いにおいてもっとも大事なことは，両親という他者の存在によって，自己と他者との相対的比較という最初の場を与えられるということ，そしてまた両親との相性がいかなるものであれ（両親と相性があうかあわないか，という問題があるにせよ），自分の人生を出発するうえでの生きる場，自分の生みだされた環境のなかに人生の目標を発見する場が与えられている，ということである。

**それぞれの個人，あるいはそれぞれの家族がどうしてもやらなければならない生活という共同の仕事のなかで，たれしも人は，あるべき理念の狭い領域内においてではあるが，ある程度の知力と現実的な諸能力を引きだしてゆく（〔4〕『代議政治論』388頁）。**

すべての人間は自らに与えられた環境を背景として人生を出発し，その環境のなかから，自らの生きる道を発見してゆく。いいかえればたれしも人は，自分の生命を世に大きく生かしてゆくためにもっともふさわしい時代，もっともふさわしい環境のなかに生まれてきている，といえる。

### 〔1〕—(2)　世間との相対的比較

#### ①　地域社会における相対的比較

両親との出逢いは，人の生きる最初の環境を用意する。それは，ひとつには自分の生きる場であり，自分の生きる自然的環境を意味するが，いま一つには自分を取り巻く世間を意味する。

人が他者との比較をおりなす最初の世間は，いわゆる地域社会である。それは当然，自分が生命を与えられた場所であり，あるいはまた自分が直接に生活を営む世間という場所である。

いうまでもなく人間は，自分ひとりの力では生きてゆけない。人間は皆，常に見知らぬ他者の恩恵を受けて世に生かされている。まさにそれは，社会とは人が互いに支えあい助けあって生きている，ということを指し示す。

大人であれ子供であれ，人が今日の生命を明日へつなげてゆくためには生活してゆかねばならない。生活のためには他者の存在が必要である。すなわちさまざまな職業があってはじめて人びとは生活を営んでゆけるのであり，たとえ自分が一つの仕事に専念していようと無事に毎日の生活を営んでゆけるのは，世間に多くの仕事に携わる人びとがいるからであり，自分が学校へ通ったり，あるいは会社で仕事に携わっている間に，自分以外の人びとが自らの仕事に携わっていてくれるからに他ならない。

したがって地域社会，一般世間といったなかにも，自己と他者とを比較する対象が存在する。いいかえれば自分の住んでいる地域や，親戚のお兄さんなどといった世間の人びとのなかにも，共感の対象が存在する。たとえば「歌がうまいから歌手になりなさい」といった世間の人びとの励ましによって，自分は歌手になる，という人生の目標を発見しうることもあるのである。

> 同じひとつの生活様式が，ある人にとっては自分自身のすべての行動と共感能力とを最善に引きだす健全な刺激となってゆくのであり，……いいかえれば自分のおかれた生活環境のなかに自分自身がそこに共感しうる個性の豊かさがあれば，自分自身は幸福の正当なわけまえに預かることができるし，さらにはまた自分自身の本性にしたがって可能なかぎりの精神的・道徳的・美的成長を遂げることができるのである（〔2〕『自由論』293頁）。

さらにいえば近所においしいパン屋さんがあって，パン屋さんになる，という人生の目標を発見しうる者もあるだろう。また多くの俳優は，近所に映画館があったり親が映画好きであったために，子供の頃から映画をたくさん見る機会に恵まれ，自分も将来，絶対に俳優になろう，と十代のうちに夢を抱いている。

人間はこうして数多くの他者の恩恵を受けながら，自分が生活する世間，すなわち自分の住む地域社会のなかで自分の生きる世界を見いだしてゆくのである。

### ② 学校における相対的比較

いうまでもなく人が生きてゆくためには，人生の目標が必要である。人生の目標とは，自分の人生に託する望みを見いだし，その望みを叶えてゆくということである。人生の目標の発見は，最初の自己の発見である。その発見のためには，自らの個性＝自己能力の発見が前

提となるのであり，人の人生における最初のその発見の場は，多くのばあい，学校という組織のなかにあるといっても過言ではない。自分の生命を与えられた自然的環境，あるいは地域社会という世間人びとが集まる学校という教育機関のなかで，人びとは多くの時間を費やし，見知らぬ多くの他者との意見や感情の比較検討を通じて，自分の理想を映しだす一人の他者という存在のなかに自らの望みを見いだし，人生の目標を発見してゆくのである。

**人びとは，たえずお互いに個性の刺激を与えあって，自分自身の高度な能力をますます使用し，自分自身の感情に見あった目標を，愚かでなく賢明な，堕落的でなく向上的な対象と観照との方向に自らむかわせてゆかなければならない（〔2〕『自由論』302頁）。**

たとえば一般に人は，ある一定の年齢に到達すると，学校という教育機関に就学する。小学校へ入学すると，自分の住む地域社会の子供たちがひとつの学校へと集まってくる。そこでは読み書き計算といった学習からはじまり，学年が上がるごとに高い教養を育んでゆくことになる。そのことは当然，自分の生きる世界を広げるが，またそれは新しい世界との出逢いでもある。

しかし他方，学校は自分とは異なる個性＝自己能力の持ち主との出逢いの場でもある。

たれであれ人間には皆，個性というものがある。個性とはその人自身にあらかじめ授かっている人間本性であり，その人自身の性格や感情を含めた，いわゆる人間性に他ならない。その意味での個性に見合った目標を見いだせば，たれであれ人は著しい能力の発展をみる。ゆえに自己能力は，その人自身の個性に対応して発展する。

しかし一般に人間は，自分自身の個性を見いだすことが容易なことではない。なぜなら自分ひとりでは自分の個性を発見することができないからである。人間一人ひとりは，人間であるという点では同質の個人であるが，しかし自分にしかない個性は自分ひとりのものであるということ，すなわち人間には自分ひとりが所有する個性を持っているという点では，他者とは異質な個人なのである。

したがって人が，自分は他者とは異質な個性の持ち主である，ということを発見するためには，他者の存在が必要不可欠なのである。いいかえれば人は，見知らぬ数多くの他者と自己とを常に比較検討し，自分の感情や性格，一言でいえばいわゆる個性＝自己能力を比べることによって，はじめて他者とは異なる自分自身の個性＝自己能力を発見することができるのである。その発見こそ，まさに最初の自己の発見である。

学校教育は，社会が好きであるとか，理科が好きであるといった自分の個性を発見する機会を与える。そして学校には，個性に見あった夢を抱き，その夢を叶える可能性がある。

歌手になりたいとおもっている子供は，学校で音楽に力を入れたり，クラブ活動やバンド活動をする。また学校教育を通じて一般常識を身につけ，共感能力が高まる。そして学校には，具体的にどんな歌手になるのかを決定づける共感の対象が存在する。たとえば英語の授業で聴いた外国のある特定のひとりのポップス歌手に共感した者は，自分がどんな歌手になるのか，明確に見定めることができる。こうして人は，学校教育という場のなかで共感の対象となるべき理想的人物を発見し，歌手として生きる自分の道が民謡なのか演歌なのか歌謡曲なのかポップスなのかクラシックなのかを決定づけてゆく。

このように自分の生まれおちた家庭環境をはじめとして，育ってゆく学校や地域社会，一般世間といった環境のなかに，利己心が育つ環境が与えられている。

その環境のなかで人間は，自分と他者とを比較し，理想的な人間を見いだすことで，個性＝自己能力を発見してゆく。

他方では，不遇ともおもえる環境が利己心を育てるケースもある。

たとえば親や親戚一族といった最初の世間の不完全さに対する不平不満や，家が貧しいことに対する不平不満が，金持ちになりたい，といった利己心を育てる。

おまえの家は経済的に貧しいだろうとか，おまえは運動が苦手だろう，と世間から中傷されることで，逆に金持ちになってやるとか，勉強して偉くなってやる，といった理想が生みだされてゆく。

そうして自分の心のなかに，理想的なイメージが培われてゆく。たとえば金持ちになるために会社の経営者になろう，といった具体的な，理想的な人間像の発見は，いわば不遇ともおもえる環境のなかから生みだされてゆく。

あるいはまた世間の批判によって，共感能力がかえって高まり，世間一般と自己との相対的な比較によって，逆に最初の理想を発見するばあいも多い。

人間は，人生が自分のおもうように進展しないという不遇にあって，自己の不完全性を識る。

たとえば歌手になりたい，大学教授になりたい，経営者になりたい，といった利己心があっても，なかなかその望みが達成されえず，また歌手になってレコード会社に所属しても売れないとか，あるいはまた教授になっても組織のなかで自分の意見が通らない，経営者として会社の従業員とうまくいかない，となれば人は，自分の人生が自分の望みどおりに進展しないのは，自分自身に原因があるのであり，つまりは自分が不完全だからもっと頑張らなければならない，と考えて決意を新たに全力で努力するだろう。

いずれにせよ理想的な人間を目指してゆく過程のなかで，人は不遇の境遇に直面し，自らの不完全性ゆえに他者からの批判を受ける。

有名歌手を目指してもレコードが売れなければ，まだ売れないのか，と他者の批判を受ける。あるいは逆に自分の売れない原因を，レコード会社の営業や作詞家・作曲家の責任に押しつければ，生意気だ，とかえって批判される。

人生はとんとん拍子にはゆかない。結局，あきらめずにやり続け，能力を高めてゆく以外に道はない，と識る。そして不遇のなかにあって，自己能力を高めるにつれて，共感能力が高まり，これまで自分が受け入れられなかった状況，人間を受け入れられるようになる。その過程のなかで，真にやりたかった仕事がより具体的に心にイメージされてゆく。

たとえば歌手であれば，漠然と歌が好きで歌っていた者が，自分がずっと捜し求めていた具体的な究極の理想的人物となる歌手を発見したり，あるいは真に歌いたい歌と出逢うことによって，自らのうちに宿る感動の心を発見しうるのである。そしてその時，自分もまたその歌手のように，あるいは自分に感動を与えてくれたその歌のように，自分の仕事を通じて世に感動を伝えてゆきたい，という認識に至るのである。

いずれにせよ人間は，このように自分の人生が自分の望むがままに順調に進展しない時であればこそ，自分の不完全さを認識し，これまで自分が批判していた他者にさえも学ぶことを覚えるだろう。

人間の判断のすべての力と価値は，判断がまちがっている時には訂正しうるという唯一の性質によるのだから，その判断に信頼をおきうるのは，それを訂正する手段が常に身近にある時にかぎられるのである。ある人の判断が，本当に信頼に値するばあい，……その信頼は自分の意見や行為への批判について，いつでも他者に心を開いていたからであり，自分に対して言われるすべての反対意見を傾聴し，その正当な部分すべてから利益を得て，自分自身に対して，また必要な時には他人にも，その誤りを受け入れることを自らの習慣としてきたからである（〔2〕『自由論』236頁）。

人間は無誤謬ではないことは明らかである。人間の真理は大部分は半真理にすぎないこと，意見の一致は相反する意見のもっとも十分でもっとも自由な比較対照から生じたものでないかぎり望ましいものではないこと、また真理のあらゆる側面を認識する人間の能力が今日よりずっと増すまでは多様性は悪ではなくて善であること，これらのことは，人間の意見に対してと同様，その行動の様式に対しても適用される原理である（〔2〕『自由論』279頁）。

人間は，自分を絶対的存在と考えれば，他者への批判しか生まれてこない。しかし自分の不完全さを認識できれば，人間それ自体は過ち（あやま）をおかす存在だと言うことを認識し，人間そ

れ自体の不完全さを受け入れ，自らと他者との相対的比較の重要性を認識しながら，他者に学ぶことの大切さを身をもって識ってゆくのである。

人間はこのようにして，一方では自己の不完全性を，また他方では他者の不完全性を認識する。いずれにせよ人は，こうして自己と他者との相対的比較によって人間の不完全性を認識してゆく。

そうして自らの不完全性のゆえに，人間は自己と他者との相対的な比較を通じて人間それ自体の不完全性を認識し，人間的に鍛えられてゆく。そうした経験を通じて人は，著しく共感能力を増し，結果として多くの人間を受け入れられるようになる。

### ③ 組織社会における相対的比較

しかし家族や地域社会のなかに自己の喜びを見いだせなかった人は，自己のその境遇に不平不満をなげかけ，社会のなかに自分の喜びを捜し求めてゆく。

一般に社会は，市民社会といわれるが，それは具体的にいえば組織社会の集合体である。人びとは自分の所属する企業や公共団体などの組織社会のなかで仕事に従事し，それぞれに自立した生活基盤を形成する。それゆえ社会とは，自分が直接に接する世間である。

> 人間一人ひとりにとって社会とは，自分が直接に接触する一部の世間であり，たとえばそれは，自分の所属する党派，宗派，教会などにおける社会階級を意味する（〔2〕『自由論』233頁）。

人間が社会と不可分な関係にある以上，たれであれ人は，結局のところ組織社会に身を置いて，自己の満足を見いだしてゆかざるをえない。

満足とは，これまでの自分の人生あるいは自分の置かれた境遇に飽きたらず，不満足を感じる人間がより大きな望みの対象を自己と他者との相対的比較のなかで見いだし，そうして見いだした自らの望みを実現した時に得られる快感である。

> 満足とは，現在は自分が手に入れてはいないが，しかし自分が喜びを持って生きてゆける能力を，つまり望みの対象となる相対的価値を正しく発見すること，また大きな望みの対象としない小さな望みを積極的に否定するということである（〔4〕『代議政治論』401頁）。

人間は自分の望みの対象が何であるか，社会における自分の存在価値がどこにあるのかを，自己と他者との相対的比較によって発見してゆかなければならない。

要するに人間は，自らの置かれた組織社会のなかで，理想とする人間を自己と他者との相対的比較によって発見しなければならない。

人生の出発点においては，望みの対象は，一般に富の増大にむけられる。

望みの対象とは，人生の価値規準となる他者のことである。

人間は，人間本性として欲望を所有している。しかし人間の明確な望みは，積極的に探し求めてこそ発見されうるのであり，自ら探し求めなければ，発見されえないのである。

望みの発見とは，自分の存在価値の発見であり，いいかえればそれは自分の個性＝自己能力の発見である。

人間の望みは，自己と他者との比較対照によって，はじめて発見されうるのである。常に自己と他者とを比較対照し，その不特定多数の他者のなかから望みの対象となる他者を発見しえた時，人間は自己の明確な望みを発見しうるのである。

いいかえれば人は，その時，他者とは異質の自己の存在価値，つまり他者とは異なる自分の個性＝自己能力を発見しうる。まさにその発見は，人生における最初の喜びの発見である。

それゆえ不満足な自分から満足な自分への移行は，自らの喜びや望みを満たしてくれる対象となる他者の発見によってこそ，成立しうるのである。

人間は理想的人物を他者のなかに見いだした時，はじめて人は自分の望みが何であるのかを明確にわかるのである。その意味では人生は，他者の存在によってつくりだされるといえる。

そのばあい，自分をとりまく社会，とりわけ企業社会は，自己の望みの対象となる他者を発見する最高の場である。

一般に企業社会における人間関係は，利害関係であり，同時にまた競争関係である。企業社会は，利潤の増大を目標とするから，そこで働く人びとに仕事に対する利害認識を植えつけ，他者との競争力を要請するのである。

仕事は，自己と他者との共同作業であり，つまりは共同の仕事である。したがって自分の仕事上の失敗は，共同責任となるか，少なくとも自己責任となる。自分の仕事に利害が絡む以上，自分の失敗は最終的には組織全体の損失ともなりかねない。

しかし他者の自己に対する批判には，極めて重要な意味がある。それは，自分の過ちを矯正する経験と討論の場を与える，ということである。

**人間精神の特質は，知的・道徳的存在としての人間自身のなかに在る尊敬に値するすべてのものの源泉，誤謬が改善されうる，ということである。すなわち人は，自分の過ちを討論と**

経験によって改めることができるのである（〔2〕『自由論』236頁）。

およそ人間は，他者の批判がなければ，自分のおかした失敗や過ちに気づいたり，その原因を他者の経験や他者との討論を通じて考えたりすることができない。となれば自分を改善する機会が失われる。

人間は，たとえ相当な才能に恵まれていても，反対意見に対しては，さまざまな角度から理解する努力をほとんど払わないことが多い。また一般に人間は，自分の無知を欠点と気づくことはめったにないのである（〔3〕『功利主義論』482頁）。

しかし他者の批判や反対意見のなかには，自分にはない新たな発想や思考が存在し，また自分の欠点や無知の自覚を通じて自己を改める可能性が存在するのである。

他者の批判は，未熟な自分をいさめ，個性＝自己能力や知力＝道徳能力を鍛えあげ，自己改善を促す欠点の矯正に結びつく。また他者の批判は，他者との討論の機会をつくりだすが，それは他者の経験を自分の経験とする場を与え，他者の意見や感情についてゆく理解力や共感能力を育む場を提供するのである。

それゆえ企業社会では，人間関係は競争関係である。

常識的に考えれば企業は，常に同一業種の他企業と厳しい競争を展開している。その競争に打ち勝つには，企業内で働く人間一人ひとりの存在が重要である。というのは人間は，たれもが独自の個性＝自己能力を持っているからである。企業内において，各人の個性＝自己能力が多分に発揮されれば，独創的な商品を生産し，おのずと他者にまさる結果を得られる。企業内における競争は，そのために重要である。

他者との競争は，仕事に対する強い利害認識を育み，勤労意欲を高め，自己の個性＝自己能力の発見に寄与する。というのは人間の個性＝自己能力は，使用するごとに向上するからである。

人間が崇高で美しい観照の対象となるのは，彼ら自身のなかにある個性的なもののすべてをすりへらして一様にしてしまうことによってではなく，他人の権利と利害とによって課された制限の範囲内でそれらを育成し引き立たせることによってである。そして仕事というものは……高尚な思想と崇高な感情にさらに豊富な糧を与え，……すべての個人を人類に結びつける絆を強化する（〔2〕『自由論』287頁）。

### ④ 歴史にみる相対的比較

人の生きる自然的環境は，人の人生を決定づける。このことは説明の余地もないことである。

たとえば織田信長は，織田信秀という戦国武将の家に生まれたがゆえに，そしてまた父・信秀が下剋上という時代情勢を背景として経済的・政治的自立基盤を築いたがゆえに，父の死後，尾張の一領主という地位について天下統一を目指せる立場となった。すなわち信長は，自分が生命を与えられた家庭的環境と，天下統一を目指せる地理的環境を与えられていたがゆえに，自らの才能を見事に発揮することができたのである。

裏を返せばいかに大天才といわれた信長であれ，父親の成し遂げた先駆的仕事はもとより，尾張名古屋という天下統一を狙える地理的環境を与えられなければ，自らの生命を燃焼し，その類(たぐ)いまれなる才能を発揮することはできなかったのである。

このこと自体，人に与えられた自然的環境は自分の生命，すなわち才能を生かすためにもっともふさわしい環境といえるのである。

しかし一方，信長の人生を例にとれば，信長を取り巻く環境もまた信長にとってもっともふさわしい環境であったといえるであろう。

信長の生きた時代は，応仁の乱を経て，経済的・政治的矛盾が著しく大きくなった下剋上の時代であり，したがってまた国家の秩序が著しい混乱を極めた時代であった。信長はそうした時代情勢に直面し，父・信秀の死後，天下の秩序回復という一点に自らの使命を見いだした。が，そのためには自らの領地内の政治的・経済的結束を深め，さらには領地拡大を実現しなければならなかった。しかしそうした信長の意図に反して，一族や多くの家臣たちは信長を冷やかな眼で見，異端児と見た。ために信長を取り巻く環境は，いわば八方ふさがりの状況となったが，しかし信長はそうした困難な状況を，自らの力によって克服していった。父の時代には，最大の政治的敵対者であった斉藤道三の娘を自らの妻とし，それによって政治的同盟を図り，領地経営を安定化ならしめ，さらにはまた武田信玄や徳川家康と誼(よしな)を通じ，ひいては自らの妹・お市の方を浅井長政の妻にめとらせ，世間に味方を得る一方，お家主義に則った古い格式や伝統を打ち破り，能力のある家臣を採用し，あるいはまた新式の鉄砲の大量導入による画期的な戦法や軍事政策，さらには関所撤廃や楽市楽座などの経済政策によって敵対者を倒し，そうした長年の努力の末に，天下統一の基礎を固めたのであった。

**すべての賢明な，また高尚な事柄の創始は，個人から生まれるものであり，また個人から生まれなければならない。そして一般に，最初はたれかひとりの個人から発生するのである。**

平均的人間の名誉とも光栄ともなることは，人びとがその創始者たる天才についてゆけること，すなわち一般の人びとが賢明で高尚な仕事を成す天才に内面的に共感することができ，眼を開いてその天才に導かれてゆく，ということである（〔2〕『自由論』291頁）。

信長の人生を振り返ってみると，信長という人物には，信長にもっともふさわしい世間が与えられていたことが明らかである。もとより信長は，独創的発想の持ち主であったが，そのためにかえってそれまでの古い伝統を継承する戦国武将たちの有する既成概念，ありていにいえば世間の常識という既成概念の枠にとどまることはできなかった。その意味で信長は，世間の人びとに受け入れられる人物ではなかったし，自分自身でもまた，そうした既成概念のなかで生きようとはおもわなかった。それゆえ信長は，発想の逆転によって世間の既成概念を打ち破り，世間の度肝を抜く結果を目指したのである。

まったく平均的人間からのみなる大衆の意見を……矯正するものは，卓越した思想的高みに立つ人びとの，ますます際立った個性であろうとおもわれる。まさにこのような状況においてこそ，とくに例外的な個人たる天才といわれる人びとが，大衆と異なった行動をとるのを，ひきとめることなしに奨励されなければならないのである。他の時代においては，天才たちがたんに大衆と異なった行動をとるだけでなく，大衆より優れた行動をとるのでないかぎり，天才たちにそのような行為にはなんの利点もなかった。……世論の専制は，奇矯さを非難の的とするほど非常に激しいものであるが，まさにそのゆえにこそ，その専制を打破するために人びとが奇矯であることが望ましいのである。性格の強さが豊富であった時とところにおいては，奇矯なことが常に豊富であった。そしてある社会のなかの奇矯さの量は，一般に，その社会が含む天才，精神的活力，道徳的勇気の量に比例していた（〔2〕『自由論』292頁）。

信長にすれば，自らの発想に伴う政治戦略および経済戦略が自分の望む結果を生みだせば，自らの発想は正しいと証明できる，そしてその結果によって世間は自分を受け入れる，と考えたのである。事実，信長は世間に受け入れられない発想によって，世間に受け入れられる結果を導きだした（逆転の発想）。そして事実，信長は自らの望む結果を導きだしたのである。このことは詳しく論ずるまでもなく，信長がまれにみる才能を発揮し，名だたる戦国武将を打ち破って，事実上天下統一を成し遂げたという結果を見れば明らかであろう。

信長の成し遂げたその偉業は，ひとえに人材の登用に収斂される。一般の人間は眼の前に直面する困難が大きければ大きいほど，自らの達成しようとする目標が遠ざかる，と考え

る。だが信長の考えでは，困難が大きければ大きいほど，その困難を克服すれば手に入る成果は大きいのである。まさにそれは，目標の前にあきらめは禁物であり，ひとまずやり始めたことは最後までやり抜くことこそ大事である，ということであった。そしてまた信長の一般人と異なる最大の優れた発想は，自ら決したことにおいては世に不可能はない，ということであり，自分を信じ抜いてやり抜けば必ず事は成る，という一事であった。眼前に困難が立ちふさがれば，その解決は方法を変えればよい，ということだけである。その信念のゆえに信長は，従来には見られない経済的・政治的戦略を取ることができたのである。

**信念を持つひとりの人間は，利益だけしか考えない九十九人の人間に匹敵する社会的な力である。ある統治形態またはある種類の社会的事実が望ましいということを広く説得するのに成功した人びとは，社会のさまざまな力を自分の側に配置するためにもっとも重要な第一歩を踏みだしたのと，ほとんど等しいのである（〔4〕『代議政治論』363頁）。**

しかし信長の発想のもっとも優れた点は，自分の発想に伴う理念を成就するための人材を登用したことにある。すでに世に広く知られていることであるが，豊臣秀吉，明智光秀，徳川家康といった逸材の才能を見抜き，そうした天才たちを見事に使いきったことに，信長の大天才としての才能があった。こうした人びととの出逢いがなければ，いかに大天才・信長といえども，天下を治めるには至らなかったであろう。

ここで留意すべき点は，信長に生きた時代に，豊臣秀吉や徳川家康といった天才たちが現実に存在しえた，ということである。

こうした天才たちが世間のなかに存在していればこそ，いいかえれば自分の生きた時代のなかに，したがってまた自分を取り巻く環境のなかにこうして自分の手足となって働くに足る天才たちが存在していればこそ，信長は天下人となりえたのである。

要するに信長は，自分の直接の家臣たちにとどまらず広く世間を見渡し，そしてまた自らの使命を達成するのに必要な人材を常に観察し，自らの使命達成のために必要な人材をあらかじめわりだしていた。すなわち信長は，自分が天下統一という使命を果たすためにどういう人物を必要とするのかを，あらかじめ知り抜いていたがゆえに，いわば広い世間のなかから数多くの有能な人物たちを相対的に比較し，したがってまた自分の使命達成のために必要な人間を必要な場所に配置し，自分の身代わりになって働いてくれる人びとの生命を存分に生かしてゆくことができたのである。

天下統一という偉業を成し遂げた織田信長の大天才たる所以（ゆえん）をひとつだけあげるとすれば，それは自らの使命をはっきりと認識し，その使命達成のための人材を登用し，適材適所

に配置した，という一点に尽きる。とはいえいま一度繰り返すが，世間という社会のなかに秀吉や光秀や家康といった人物が存在していればこそ，信長はそうした人物と出逢うことができたのである。それを考えれば人間には皆，自分の生まれいでた環境，すなわち自分を取り巻く環境のなかに，したがってまた自分の生きている世間という社会のなかに自分の使命を達成するために必要な人物が与えられていることは明らかである。

それゆえ一般に人は，自分が関わってゆく世間との交わりのなかで，見知らぬ多くの他者と自己とを比較し，まずもって自らの人生の目標を見いだしてゆくことが大事となる。

さらに歴史を考察してみれば，たとえば明治維新という偉業を成し遂げた最大の功労者である西郷隆盛や大久保利通は，薩摩という環境のなかに生命を授かってこそ，時代の激しい変化に対応しきれぬ徳川幕府を打倒し，時代の要請する国家再編とそれに伴う新しい国家を構築するという使命に目覚め，その使命を全うすることができたのである。

環境が人を育てる，という言葉があるが，まさにそれは真理をついた言葉であるといえよう。自分が生まれた故郷，そこに存在する山や川などの大自然，その土地に受け継がれている慣習や伝統や風土・文化，その土地が生みだした偉大なる英雄や先人の生き方，それらの環境が自らの将来を導いてゆくのである(3)。

外様藩という薩摩の政治的立場，七十七万石という大藩を背景とした経済的立場，さかのぼれば薩摩が関ヶ原の合戦において徳川家康と敵対したという歴史的背景，日本の最南端に位置するという地理的環境およびその伝統のなかで育まれた治世者への反骨精神という伝統や文化，あるいはまた幕末において時代の先駆的思想の持ち主であった島津斉彬という英明君主との出逢いなどを考えてみれば明らかなように，西郷隆盛と大久保利通は薩摩という環境のもとに生命を与えられて，はじめて自らの使命を果たすことができた，といえよう(4)。

だがその西郷や大久保にせよ，両親という存在がなければ自らの生命をこの世に誕生させることができなかったのであり，その意味において両親は，はじめから自分の生命を世に大きく生かす仕事を成してくれる存在なのである。逆説的にいえば両親の存在があればこそ，西郷と大久保は薩摩という環境を与えられ，それを背景として自らの使命を果たすことができたのである(5)。

まさにこのことは，自分に与えられた出逢いや事実のすべては必然であるということ，たれしも人は自分の生命を世に大きく生かしてゆくためにもっともふさわしい時代，もっともふさわしい環境のなかに生まれてきていることを意味する。言葉を変えれば，すべての人間は自らに与えられた環境を背景として人生を出発し，その環境のなかから，自らの生きる道を発見してゆく，といえるのである(6)。

**天才はきわめて少数派であり，また常に少数派になりがちである。しかし天才を生むためには，天才の育つ土壌を保存することが必要である。天才は，自由な雰囲気のなかでのみ自由に呼吸することができる（〔2〕『自由論』289頁）。**

**〔1〕—(3)　相対的比較の繰り返しが，理想的な人物，ひいては感動の心を発見させる**

さて以上のことを簡単に整理してみよう。

こうして人は，他者との人間関係＝競争関係のなかで互いに競いあい，自己能力の向上に努めれば，必ず自分の個性がどこにあるのか，発見できる。なぜなら自己能力の向上によってこそ，人間は自然的感情を訓練・陶冶せしめ，共感能力を高めてゆくからである。

たれであれ人は，人間本性として欲望を所有している。しかし自分の明確な望みを発見するためには，ある程度の共感能力の向上が必要とされる。

なるほど人間は，仕事に就いた当初の時期には，欲望それ自体は持っている。しかしたれしも人は，最初から自分の望みが明確に定まっているわけではない。

しかるに他者の厳しい批判は，自分の欠点を矯正し，あるいはまた他者の心の痛みやおもいやりの感情を育てる。他者との競争は，自分を厳しく鍛えあげ，自分の長所を伸ばし，個性＝自己能力それ自体を育てあげる。

ここに至って人間は，ようやく共感能力を向上せしめ，自分が本当は何を成し遂げたいのか，どこに自分の存在価値があるのかを，真剣に探し始める。自分は他者とは異なる存在である。そしてまた自分の人生は自分の力で切り拓いてゆかねばならぬ。そうした人生に対する積極性，自立性は，他者との交わりのなかで生みだされてゆくのである。

**自分の人生設計を，自分個人の選択ではなく，世間や自分が属している世間の一部の他者の選択にまかせる人は，猿まねのような模擬能力の他には，いかなる能力をも必要としない。しかし自分自身で人生設計を選択する人は，自分のすべての能力を使用する。つまり見る観察力，予測する推理力，判断力，決定に必要な資料を集める能力，決定する識別力を使用しなければならなくなる（〔2〕『自由論』282頁）。**

このように自分の共感能力が高まり，積極的，自主的に自分自身のあるべき人間像を探し求める時，自分の望みの対象となる他者は必ず発見される。

すでに自分は，世間には自分と反対意見があること，そしてその反対意見によって自分の立場や自分の個性＝自己能力を理解しえたのだから，自分の求める理想的な人物は，漠然とではあるが，ある程度はわかっている。その人物を求めて不特定多数の他者を観察する時，

たれしも人は，必ず自分の求める人物とめぐり逢えるのである。

世のなかには，自分の求める理想的人物は必ず存在する。なぜならそれは，自分という人間が存在するかぎり，自分と同じようなことを考え生きている人間がどこかに存在しうるからである。そしてそうした人物は，自分が求めていればこそ，与えられるのである。

一見，不思議なことに自分の求めている理想的人物は，意外にも身近に存在する。

一般に人は，人生上の経験を他者と討論する機会が少なければ，自分の理想的人物が身近にいるのに，それを見過ごしてしまう。しかし共感能力が著しく高まれば，たれしも人は，これまで見過ごしてきた特定の他者のなかに自分の望みの対象となる他者を発見することができるのである。

**自分自身の意見を、他人と対照することによって訂正し完全にするという着実な習慣はそれを実行に移す際に疑念や躊躇を引き起こすどころか、それに正当な信頼をおくための唯一のたしかな根拠となるのである（〔2〕『自由論』236頁）。**

こうして人は，望みの対象となる他者を発見すると，その特定の他者を人生の相対的価値に定め，自分の矛盾を改善し，理想的人物へと近づく努力を払うようになる。

こうなると人間関係は信頼関係となる。なぜなら自分の人生に明確な望みを見いだし，人生の目標を設定しえたのは，望みの対象となる特定の他者を発見しえたからであり，その発見は不特定の他者と交わり，その大勢の他者との経験や討論を通じ，自己能力や感情の訓練・陶冶によって共感能力が向上しえたからに他ならない。つまり人は，自分が直接に交わる大勢の他者の存在があればこそ，望みの対象を明確に発見できるのである。

しかし人間は，だからといってすべての他者に対する感謝の心を持てるわけではない。というのは人間のひとつの望みは，つぎなる望みを生みだしてゆくからである。つまり人間の望みは，他者に対する感謝よりも，自分のさらなる望みの成就に結実してゆくのである。

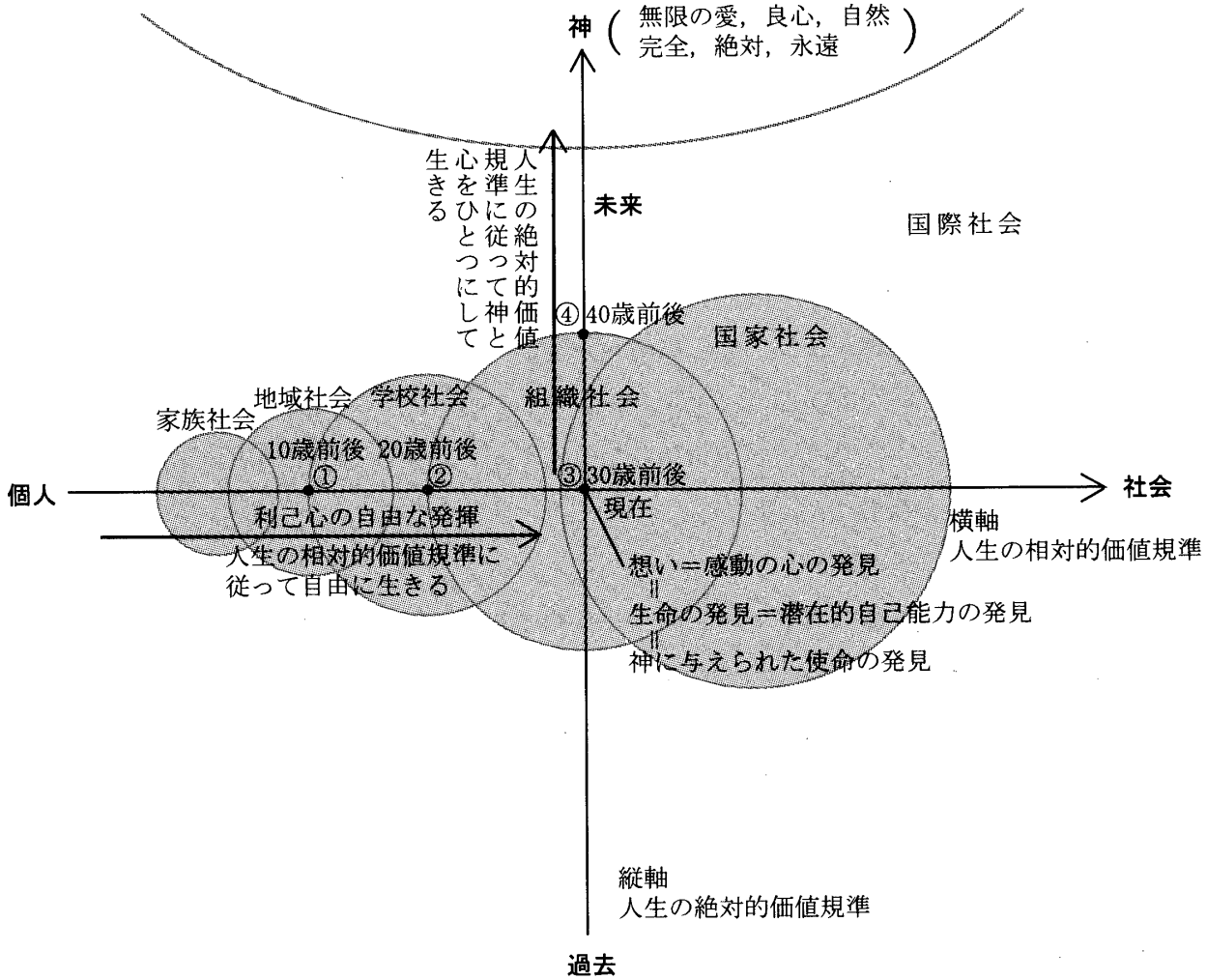
このことは，望みの対象となる他者は，自分の望みが成就されるたびに変わってゆく，ということを意味する。

人間の望みは，それが真に自分の望むことであれば，必ず成就する。その結果，新たな望みが生まれる。それは望みの対象となる他者が新たに登場することでもある。

人間の望みは，それが成就されるたびに，しだいに大きくなり，理想的人物もまたこれまで自分が比較対照としていた人物よりも，大きくなる。望みが大きくなれば，人生の目標も高まり，また理想とする人物が変わるのは当然のことである。

こうして人間の望みは，どこまでも果てしなく大きくなり，尽きることがないかのように

図１　人生の相対的価値規準と絶対的価値規準




① 人間は，家族社会や地域社会，学校社会のなかで自己と他者との相対的比較を繰り返し，10代までにある特定の他者に自らの理想的人物を見いだし，人生の目標を発見しなければならない。そしてその目標にむかって利己心を自由に発揮すればこそ，20歳前後には自らの望みを叶え，自らの個性＝自己能力を生かして組織社会（仕事場）のなかで活躍してゆけるのである。

② そうしておよそ10年間のうちに，自らの仕事を通じて意識と共感能力を高めることができれば，自らの良心＝神の無限の愛の心が照らしだしたある特定の他者のなかに自らの究極の理想的人物を見いだし，自らの想いを発見し，感動の心に目覚める。まさにそれは，自己の発見，つまり自らの生命＝潜在的自己能力の発見に他ならない。

③ そうして30歳までに神に与えられた自らの使命を発見し，したがってまた神を発見すれば，人生の相対的価値規準を乗り越えて人生の絶対的価値規準に従って，神と心をひとつにして自らの愛を世に広く高く施してゆけるようになる。

④ そうして人は，神に与えられた使命のために生命を注いで生きてゆく時，おのずと個人愛にめぐり逢い，隣人愛＝人間愛→社会愛→国家愛→世界愛＝人類愛→宇宙愛へと自らの愛の心を深くよみがえらせて，すべての存在に感謝の心を持って生きてゆけるようになるのである。

⑤ 社会とは，人間の心がつくりだす組織であるが，人間の心が利己心→公共心→無限の愛の心へと深く培われてゆくにつれて，社会もまた資本主義社会→共同主義社会→人間愛に満ちた社会へと発展し，ついには神の無限の愛の王国へと結実する。

おもえる。が，それを打ち破る日がやってくる。その日こそ，自分が生まれ変わる一瞬である。

それは，他者のなかに自己の究極の理想的人物を発見する時である。その時，人は自らの感動の心を発見する。感動の心の発見は，信頼関係を前提とする。究極の理想的人物は他者のなかに存在するから，他者への信頼がなければ，人は自らの感動の心を発見することはできないからである。

さらに信頼関係の前提となるのは，望みである。他者への信頼関係は，競争関係を前提とするから，他者への信頼を持ちうる者は，望みの持ち主にかぎられる。

したがって究極の理想的人物を発見できる者，すなわち自らの感動の心を発見しえる者は，望みの持ち主のみである。望みは望みを生みだすが，しかし他者への信頼を持つかぎり，必ず感動の心の発見へと結実する。

> われわれの生存の基盤自体の安全をはかるため同胞に協力を求める権利があるとおもえば，ふつうの功利が生むものよりはるかに強い感情が集まるので，感情の強さの程度の違いが〔心理現象によくあるように〕事実上，〔事故の発見を導く共感能力の〕質の違いになってしまうのである（〔3〕『功利主義論』517頁）。

そうして人は，自らの想いを発見し，感動の心を発見してこそ，神に与えられた使命を発見し，人生の相対的価値規準から人生の絶対的価値規準への転換を図り，神と心をひとつにして生きてゆけるようになるのである（図１を参照）。

注

(1) J. S. ミル『経済学原理』からの引用に関しては，参考文献に掲示したMill〔1〕を使用した。たとえば（Ⅱ p. 217，②51頁）と表示したものは，左がCollected Works Ⅱの217ページからの，右が岩波文庫の末永茂喜訳の第二分冊51頁からの引用を示している。またMill〔2〕，〔3〕，〔4〕からの引用に関しては，（　）内に邦訳のページ数を表示した。Mill〔1〕—〔4〕までの引用文中の〔　〕内の文章は，すべて引用者のものである。上記の引用文の邦訳に関しては，引用者が適宜改訳した。

(2) 自己と他者との相対的比較の重要性についていえば，たとえばフッサールは晩年の著作『デカルト的省察』の第五省察において，J. S. ミルと同様に，人間は自己の共感しうる他者への「感情移入＝連想」によって自己を発見し，自らのアイデンティティを確立して人間的成長を遂げてゆき，私的・個人的存在から公的・共同的存在へと成長してゆく，と主張している（p. 124)。いいかえればフッサールは，人間が「主体」的に自らの人生を構築してゆくためには，自分とは異質な「客体」的存在である他者への共感こそが重要なのであり，その意味で他者認識こそが自己認識を生みだしてゆく，と主張するのである。またフッサールの影響を受けたメルロ＝ポンティは，パリ大学での講義録『幼児の対人関係』において，人の人生におけるもっとも重要な能力は共感能力である，と捉えて，自己と他者との相対的比較の重要性を指摘したが，その際にかれは，幼児期の対人関係にまで遡って考察を展開し，諸個人が自己を発見するためにもっとも重要となる共感能力は，幼児期における環境に規定される対人関係が大きな影響を及ぼす，と結論づけた（P. 34)。

(3) たとえば箕浦は，文化的存在としての人間が現出するプロセスを「歴史→文化的意味体系→社会化環境としての学校（家庭)」「歴史→生態的環境→生活維持体系→社会化環境」の二つの流れで理解し，「言葉とか行為というものは，本来的に当該共同体の歴史を担っているといえる。社会化環境は，歴史のある時点で作用している社会的諸力に枠付けられており，個々人は，そこでさまざまな文化的実践に参加し，文化的意味を意味空間に取り込み，文化的存在としての『人』がたち現れてくる」（箕浦康子「文化心理学における〈意味〉」・『文化心理学』58頁）と指摘している。

(4) 本稿の主眼は，人生の絶対的価値規準＝神の無限の愛への認識に人間が到達するためには，自己と他者との相対的比較という人生の相対的価値規準に従った生き方が前提となる，ということ，いいかえれば自己と他者との相対的比較によって自己の目標を高め，そのプロセスを通じて自己の発見＝神に与えられた使命を発見しうれば，たれでも人は神の無限の愛の認識に到達する，ということを利己心，公共心，無限の愛という人間心理の発展プロセスに焦点をあてて考察することにある。なお人間の自己発見のプロセスにおいて，神がどのように関わってくるか，という問題意識に従って文化の違いと人間の自己形成に焦点をあてた研究としては，守屋慶子の「自己—他者関係の形成」（『文化心理学』128—149頁）がある。

(5) 人生の一般法則に関する具体的な考察に関しては，今後の研究課題とさせて頂きたい。本稿では，本論文で展開した人生の一般法則にしたがって，歴史上の人物（たとえば織田信長，豊臣秀吉，石田三成，徳川家康，島津斉彬，西郷隆盛，ソクラテス，イエス・キリストなど）や神に与えられた才能を十分に引きだして活躍して世を去った人物たちの人生を参考資料として，ひとつの仮説を提唱した。さらにいえば人生の一般法則は，自己と他者との相対的価値比較という人生の相対的価値規準から，自己と神との絶対的価値比較という人生の絶対的価値規準への成長プロセスであるが，そのプロセスを①家族との相対的比較，②地域社会における他者との相対的比較，③学校における他者との相対的比較，④企業組織（あるいは社会組織）における他者との相対的比較，⑤異文化社会（国際社会）における他者との相対的比較という形でより具体的に考察することも，あわせて今後の課題とさせて頂きたい。

(6) フロムは『生きるということ』の序章のなかで，「人間が生みだした社会＝経済体制すなわち人間が生みだした性格の特性は病因的であって，結局は病める人間を，ひいては病める社会を生みだす」と述べ，地球的規模での経済破壊，環境破壊といった「経済的および生態学的破局」という現実を生みだしたのは人間自身であり，つまりは人間の心理である，と主張し，「〈人間〉の根本的な心理変革」こそが急務なのである，と結論づける。もとよりフロムは，アダム・スミス，J. S. ミル，デビッド・リカードウに代表される古典派経済学の影響を受け，経済=社会システムのあり方が人間の心理を規定してゆく，という視点に立脚した心理学を構築したが，こうした視点の根底には，フロイト批判，すなわち心

理学の中心的問題を生理学的欲求の充足に還元して捉える，いわゆるリビドー理論に対する批判があった。フロムによれば，人間の欲求は経済的欲求にむけられるのであり，そのゆえに人間の心理は経済的・政治的構造に規定される，と考えるのである。しかしそのためにかえって，フロムは「文化」よりもむしろ社会，階級，経済を重視した，という批判が生じた。この点に関しては，安田一郎『フロム』（144—145頁）を参照せよ。だが私見によればフロムは，社会全般の文化的向上のためには，人間の心理変革＝意識変革に伴う経済＝社会システムの変革こそが重要である，と考えたのであって，フロムの意図は社会全般の文化的向上にこそむけられているのである。事実フロムは，『愛するということ』の全体を通して，人間の本質は愛であるがゆえに人間は本来，善なる存在である，という視点を前面に押しだしている。要するにフロムは，J. S. ミルと同様に，人間の心理＝意識は神の無限の愛の心とひとつになりうる，と考えているのであり，その前提に立って，人間の可変性と経済＝社会システムの可変性との相互関連の重要性を力説しているのである。社会心理学の立場からすれば，人間の心理＝意識と社会的環境との相互関連性については，「人間と人間との関係によって構成される環境である社会的環境と，その環境の一部を構成している個々人の心の間の関係は，社会心理学にとってもっとも中心的な研究テーマである」という指摘があるが（山岸俊男「心と社会の均衡としての文化」・『文化心理学』198—199頁），まさに正鵠をえた指摘である。

**参考文献**

〔1〕Mill, J. S., Principles of Political Economy, with some of their applications to social philosophy, 7th ed. 1871, in Collected Works of John Stuart Mill, Vol. I-XXI, ed. by Routledge & K. Paul, 1965-86.（末永茂喜訳『経済学原理』岩波文庫，第1—5分冊，1959—63年）

〔2〕Mill, J. S. On Liberty, 1859, in Collected Works, Vol. XVIV, 1977（早坂忠訳『自由論』中央公論社，1967年）

〔3〕Mill, J. S., Utilitarianism, 1861, in Collected Works, Vol. X, 1969.（伊原吉之助訳『功利主義論』中央公論社，1967年）

〔4〕Mill, J. S. Considerations on Representative Government, 1861, ed. by Haper & Brothers, New York Univ. Press, 1862.（山下重一訳『代議政治論』中央公論社，1967年）

〔5〕Fromm. Erich, The Art of Loving, 1956, by Haper & Brothers Publishers. New York（鈴木晶訳『愛するということ』紀伊國屋書店，1977年）

〔6〕Fromm, Erich, To Have or To Be?, in the World Perspectives Series, ed. by Ruth Nanda Anshen, Haper & Row Publishers, Inc., Japan UNI Agency, Inc., Tokyo, 1976（佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊國屋書店，1977年）

〔7〕Husserl, E., Cartesianische Meditationen, in Husserliana, Bd. I, Martinus Nijhoff 1950, 2. Aufl., 1963.

〔8〕Merleau-Ponty, M., Les relations avec autrui chez l'enfant, Les cours de Sorbonne, 1975.（滝浦静雄訳「幼児の対人関係」・滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』みすず書房，1966年所収）

〔9〕Recardo, D., On the Principles of Political Economy, and Taxation, 1819, in the Works Correspondence of David Ricardo, ed. by Piero Straffa, Vol. I, Cambridge, 1951.（羽鳥卓也・吉沢芳樹訳『経済学および課税の原理』上巻，岩波文庫，1987年）

〔10〕Smith, A., An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776, 2Vols., ed. by E. Cannan London, 1950.（大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』全5冊，岩波文庫，1975年）

〔11〕Smith, A., The Theory Moral Sentiments, 1759, ed. by D. Raphael and A. Macfie, Oxford, 1976.（米森富男訳『道徳情操論』未来社，1969年）

〔12〕東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保編著『心理学の基礎知識』（有斐閣，1970年）

〔13〕荒牧正憲「J. S. ミルの『人間の法則』について」（広島大学『経済論纂』第7号第4号，1984年）

〔14〕内田義彦『社会認識の歩み』（岩波書店，1971年）

〔15〕内田義彦「発端・市民社会の経済学的措定」（内田義彦他編著『経済学史』筑摩書房，1970年所収）

〔16〕大塚久雄『社会科学における人間』（岩波書店，1977年）

〔17〕芳即正『島津斉彬』（吉川弘文館，1993年）

〔18〕北山忍「文化心理学とは何か」(柏木惠子・北山忍・東洋編著『文化心理学――理論と実証』東京大学出版会，1997年所収)
〔19〕鮫島志芽太『島津斉彬の全容――その意味空間と薩摩の特性――』(ぺりかん社，1988年)
〔20〕四野宮三郎『J. S. ミル体系序説』(ミネルヴァ書房，1974年)
〔21〕白川亨『石田三成の生涯』(新人物往来社，1995年)
〔22〕白川亨『石田三成とその一族』(新人物往来社，1997年)
〔23〕杉原四郎「経済的進歩と人間的進歩――ミルの経済動態論に関する一考察――」(『経済原論Ⅰ』同文舘，1979年所収)
〔24〕鈴木良一『織田信長』(岩波書店，1967年)
〔25〕高島善哉『アダム・スミス』(岩波書店，1968年)
〔26〕高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』(岩波書店，1974年)
〔27〕中岡哲郎編著『自然と人間のための経済学』(朝日新聞社，1977年)
〔28〕福田歓一『近代の政治思想』(岩波書店，1970年)
〔29〕藤永保監修『人間発達の心理学』(サイエンス社，1990年)
〔30〕箕浦康子「文化心理学における〈意味〉」(柏木惠子・北山忍・東洋編著『文化心理学――理論と実証』東京大学出版会，1997年所収)
〔31〕箕浦康子『文化のなかの子ども』(東京大学出版会，1990年)
〔32〕安田一郎『フロム』(清水書院，1980年)
〔33〕諸泉俊介「J. S. ミル：市場経済とアソシエーション」(中村廣治・高哲男編著『市場と反市場の経済思想』ミネルヴァ書房，2000年所収)
〔34〕守屋慶子「自己――他者関係の形成――認識と文化」(柏木惠子・北山忍・東洋編著『文化心理学――理論と実証』東京大学出版会，1997年所収)
〔35〕八木冕監修編『現代基礎心理学　第1巻　歴史的展開』(東京大学出版会，1986年)
〔36〕山岸俊男「心と社会の均衡としての文化――関係の固定性と内集団ひいき」(柏木惠子・北山忍・東洋編著『文化心理学――理論と実証』東京大学出版会，1997年所収)
〔37〕渡辺二郎『人生の哲学』(放送大学教育振興会，1998年)

［付記］本論文は，石田鮎美氏との共同研究の成果である。